

令和元年6月14日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02804

研究課題名(和文) 高等教育機関で学ぶ留学生に対する日本語教育シラバスの再構築

研究課題名(英文) Reconstructing Japanese-Language Education Syllabus for Study-Abroad Students at Institutions of Higher Education

研究代表者

合田 陽子(太田陽子)(GODA (OTA), Yoko)

一橋大学・森有礼高等教育国際流動化機構・准教授

研究者番号：20373037

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：高等教育機関で学ぶ留学生のための新しい日本語学習体系の構築を目指して、以下の調査と検討を行った。

まず、学習項目を真に必要な表現に絞りこむために、8種類のコーパスを用いて、「各文法項目の出現頻度」、「技能別の特徴項目」、「技能に偏りなく使用される表現」を調査し、使用実態をふまえた学習項目を選定した。そのうえで、184項目に絞り込んだ学習項目を、初級・中級・上級各2段階ずつの6段階に配置した。さらに、それぞれの文法項目を言語行動(例：自己紹介、研究について話す、情報を集めるetc.)と結びつけ、初級から上級へと広がる学習体系の試案を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、コーパスにおける出現頻度と技能別特徴項目にもとづいて従来の文法シラバスを見直すことにより、口頭による日常的なコミュニケーションから、専門書を読み、レポートを書くなどのアカデミックな活動にわたる高等教育機関で学ぶ学生のための学習体系を、言語表現面(文法シラバス)と言語行動面(can-do)の両面から段階的にデザインしたことにある。このように学習項目を絞り込みつつ、アカデミックな自己表現力向上の具体的な道筋を示すことで、近年増加している短期交換留学生等、時間的に制約の多い学習者を対象とした、実践的に日本語力の向上を実感できる学習シラバスの提案を行えたのではないかと考える。

研究成果の概要(英文)：In this study, We construct a new syllabus of Japanese-language learning for study-abroad students at institutions of higher education, based on the following survey and analysis. In order to narrow-down learning grammatical items into expressions that are truly necessary, we surveyed “appearance frequency of grammatical items,” “characteristics by skills such as Listening, Speaking, Reading, and Writing” and “general expressions that are used for all skills” in 8 Japanese language corpora, and selected learning items based on actual language usage. This yielded 184 grammar items that were then assigned to six levels (two beginner levels, two intermediate levels, and two advanced levels). By connecting these grammar items to language behaviors (for example, self-introduction, speaking about research, gathering information, etc.), we propose a provisional learning syllabus stretching from beginner to advanced levels.

研究分野：日本語教育

キーワード：文法シラバス 学習項目 高等教育 アカデミック・ジャパニーズ 学習デザイン 技能別特徴項目

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在の日本語教育の体系は、一般に(1)初級で学ぶ文法項目が多すぎることや、(2)中級以上の学習内容が体系的でなく、類義表現の細かな違いなどに偏りがちなこと、また、(3)上級レベルに至るまでに非常に多くの時間(旧日本語能力試験の基準では900時間)が必要とされるうえ、(4)日本語能力試験最上級のN1レベルに合格したからといって必ずしも運用力が十分とは言えない場合が少なくないこと、など多くの課題を抱えており、その状況は研究開始時から現在まで変わっていない。現在の学習項目を上級まで修了するためには、日本語教育の専門機関・コースにおいて、日本語を専門的・集中的に長期間にわたって学ぶことが前提とされており、本研究の対象である留学生だけを考えても、現在、増加している短期の交換留学生や、日本語以外を専門とする留学生など、多様なニーズには必ずしも適さない。彼らのニーズは、限られた時間の中でも、各自の知的興味に見合う日本語でのアカデミックな、そして、コミュニケーション型な交流にあるが、現行の学習体系では、文法や語彙の拡充に時間がとられ、大学生活や社会生活においてそれぞれが実際に必要とする運用力の育成にまでは十分に時間を割けないのが現状である。学習者のニーズに合わせ、短期間でも学びの達成感を感じられる実用的・効率的なものにするための再検討が必要であり、特に、膨大な数が設定されている文法項目に関しては、真に必要なものに厳選して文法偏重を脱し、提示順序も含めて再構築することが課題であった。

2. 研究の目的

上述の問題意識をふまえ、本研究では、以下の2点を研究の目的とした。

(1) データにもとづき厳選した文法項目による「留学生のための文法シラバス」の確立:

学習者のニーズに合わせた新しい学習体系を作るために、まず、複数のコーパスを利用した使用実態にもとづいて、高等教育機関で学ぶ留学生が学習すべき文法項目を最小限に絞り込みつつ、学習の段階付けを行うこと。

(2) 文法シラバスと「読む・聞く・話す・書く」の各技能との関係づけ:

(1)で提案される文法シラバスについて、言語の4技能と結び付け、レベルごとにどのような言語運用の習得が期待されているのか、体系的なCan-doリストの形で提案すること。

以上2点により、文法項目を絞り込みつつも、短期間で質の高いアカデミックな学びを実現する学習体系の提案を試みた。

3. 研究の方法

以下の4つの段階をふんで、学習シラバスの提案を試みた。

(1) コーパス調査

留学生のための学習項目を選定、レベルづけするために必要な基礎データを収集、整備した。

具体的には、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)にもとづいて学習項目を選定した庵(2015)の研究成果に、新たに、会話/聴解、および、日常的な書きことば(メール文)に関するデータを拡充するための4種のコーパス(日本語話し言葉コーパス/BTS(Basic Transcription System)による多言語話し言葉コーパス/日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス/千葉大学3人会話コーパス)を用いて、BCCWJからは抽出されなかった項目の拾い出し、および、100万語換算の使用頻度、出現順位、技能別の特徴項目を調査した。使用したコーパスと形態素数、検索方法は以下表1のとおりである。

表1 調査対象コーパスと技能との対応
(うち が本研究の調査で新たに加えられたもの)

技能	対応するコーパスと使用範囲	調査範囲の総形態素数	検索方法
話す	日本語話し言葉コーパス・対話データ	149,826	himawari / 中納言
	BTSJ による日本語話し言葉コーパスの母語話者同士による会話データ	416,019	茶まめ / 文字列
	千葉大学3人会話コーパス全12ファイル	136,140	茶まめ / 文字列
	名大会話コーパス全129ファイル	1,101,817	茶まめ / 文字列
聞く	日本語話し言葉コーパス・講演データ	6,885,093	himawari / 中納言
	朝日新聞コーパス24日分のランダムサンプリング	1,354,428	茶まめ / 文字列
書く	日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパスの日本語母語話者によるメール文データ	68,107	茶まめ / 文字列
	Castel/J新書コーパス	2,014,729	茶まめ / 文字列
読む	現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)出版・書籍コアデータ	169,730	中納言

< 引用文献 >

庵功雄 (2015) 「日本語学的知見から見た中上級シラバス」 『データにもとづく文法シラバス』 くろしお出版

(2) 文法項目の選択と段階づけ

つぎに、(1)のデータに基づき、学習すべき文法項目を使用頻度の上位語 200 項目前後(用法の扱いにより増減)に絞り込み、日常的な話しことばの世界から硬い書きことばの世界へと徐々に展開するように技能別の特徴で傾斜配分をかけて、初級から上級までの 6 つの Step (1、2 初級、3、4 中級、5、6 上級)を設定した。

(3) 具体的な言語運用の中での提示

それらの文法項目を具体的な言語運用と結びつけ、各技能の中での有機的に提示するために、高等教育機関で学ぶ留学生を対象を特化した学生生活上の言語行動を設定し、それぞれの言語活動において、学習初期のレベル 1 から上級段階のレベル 6 までの Can-do リストを、「聞く・話す・読む・書く」のそれぞれの技能において作成した。

例) 「自分について話す」

[レベル 1] 出身地や好きなことなど簡単な自己紹介ができる ~ [レベル 6] 自分の専門分野等に触れつつ自己を語る事ができる

(4) コーパスから抽出された文法項目と会話・聴解の場面・機能の対照プロセス

(1)(2)による文法項目のシラバスと、(3)で作成した Can-do リストを結びつけながら、初級から上級に至るまでの、高等教育機関で学ぶ留学生の理想的な学習体系の試案を作成した。

4. 研究成果

本研究の成果は、主に以下の 3 点である。

(1) 学習デザインの根拠となる基礎データを整えたこと

学習者にとって学びやすく、かつ、実用性のある学習シラバスを構築するための基礎データとして、8 種類のコーパスを利用して、文法項目それぞれについて、出現頻度、出現順位、「聞く・話す・読む・書く」の各技能に特徴的に表れる表現、技能に偏りなく総合的に使用される表現が明らかになった。この結果、「よく使われるもの」を中心に、言語の 4 技能(聞く・話す・読む・書く)のそれぞれの言語行動の中で、学習をデザインすることが可能になった。

(2) 従来の文法シラバスのレベル設定を見直し、新たにレベルを設定したこと

(1)の調査結果に基づき、各文法項目を初級~上級まで 6 段階に配置し、従来の文法シラバスを大幅に見直した。配置にあたっては、短時間での学習を念頭に置き、各段階 30 項目程度に絞り込み、全体として 184 項目を必須学習項目とした。各レベルと学習項目数は以下のとおりである。

初級前半	Step1	20 項目	初級後半	Step2	30 項目	
中級前半	Step3	29 項目	中級後半	Step4	32 項目	
上級前半	Step5	38 項目	上級後半	Step6	35 項目	計 184 項目

この結果を日本語能力試験 (JLPT) の旧出題基準 (改訂版 2002) にサンプルとして挙げられている機能語の例と比較すると 2 級項目で 150 項目、1 級項目で 90 項目が学習項目からは除外される。今回のリストに載らないからといって学ぶ必要がないわけではないが、客観的なデータに基づいて文法項目を最低限必要なものに絞り込むという本研究の目的は、ある程度達せられたと言える。

(3) レベル設定された文法項目と技能別の言語行動を関連付けたこと

それぞれの文法項目が各レベルのどのような言語行動 (例: 自己紹介、研究について話す、情報を集める etc.) と結びつけて学ばれていくか、試案を作成した。出現頻度と技能別特徴項目をもとに策定したレベル設定により、双方向の口頭による日常的なコミュニケーションから、徐々に、専門書を読み・レポートを書くなどの書きことばを用いた文字によるアカデミックな活動へと続く段階的な学習体系を、言語表現面 (文法シラバス) と言語行動面 (can-do) の両面からデザインすることが可能となった。また、専門についてのプレゼンテーションや、教養書の読解などの教材例を通じて、かなり数が絞り込まれた文法項目であっても、十分にアカデミックな活動が行える可能性も示すことができた。

このように、Step 1 ~ 6 の段階により、学習項目を絞り込みつつ、アカデミックな自己表現力の向上を具体化した道筋を示すことにより、近年、増加している短期交換留学生や英語トラックの学習者のような、時間的に制約の多い学習者に対しても、短期間でも実践的に日本語力の向上を実感できる学習シラバスの提案を行えたのではないかと考える。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

太田陽子・永谷直子・中石ゆうこ(2019印刷中)「コーパスにもとづく学習文法項目の選定とレベル設定 高等教育機関で学ぶ留学生の日本語学習シラバス構築に向けて」『一橋大学国際教育センター紀要』10 査読あり

柳田直美・澁川晶・奥野由紀子(2019印刷中)「アカデミックな日本語学習のためのシラバス構築の試み - 会話・聴解の場面・機能から見る学習シラバス - 」『一橋大学国際教育センター紀要』10 査読あり

太田陽子・永谷直子・中石ゆうこ(2018)「8種のコーパスに見る技能別特徴項目 高等教育機関で学ぶ留学生のためのシラバス再考のために」『一橋大学国際教育センター紀要』9 pp.85-94 査読あり

庵功雄(2018)「新しい留学生向け総合教科書作成のための予備的考察」『言語文化』54 pp.3-19 査読なし

[学会発表](計2件)

太田陽子・中石ゆうこ・奥野由紀子・澁川晶・二宮理佳・宮部真由美(2018)「Grammar Syllabus Reconstruction based on Japanese Copora; Selecting minimum contents for academic achievement」2018日本語教育国際研究大会

本多由美子(2017)「複合辞における丁寧形の機能」言語資源活用ワークショップ

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 中石 ゆうこ

ローマ字氏名:(NAKAISHI Yuko)

所属研究機関名: 県立広島大学

部局名: 総合教育センター

職名: 助教

研究者番号(8桁):(20535885)

研究分担者氏名: 庵 功雄

ローマ字氏名:(IORI Isao)

所属研究機関名: 一橋大学

部局名: 森有礼高等教育国際流動化機構

職名: 教授

研究者番号(8桁):(70283702)

研究分担者氏名: 奥野 由紀子

ローマ字氏名:(OKUNO Yukiko)

所属研究機関名: 首都大学東京

部局名: 人文科学研究科

職名: 准教授

研究者番号(8桁):(80361880)

研究分担者氏名: 高橋 紗弥子(2018.3まで)

ローマ字氏名:(TAKAHASHI Sayako)

所属研究機関名: 一橋大学

部局名: 大学院社会学研究科

職名: 講師

研究者番号(8桁):(80646810)

研究分担者氏名: 永谷 直子

ローマ字氏名:(NAGATANI Naoko)

所属研究機関名: 相模女子大学

部局名: 学芸学部

職名: 准教授

研究者番号(8桁):(80760454)

研究分担者氏名: 二宮 理佳(2017.7~)

ローマ字氏名:(NINOMIYA Rika)

所属研究機関名: 中央大学

部局名: 商学部

職名: 教授

研究者番号(8桁):(80584060)

研究分担者氏名：澁川 晶（2017.7～）

ローマ字氏名：(SHIBUKAWA Aki)

所属研究機関名：国際基督教大学

部局名：教養学部

職名：インストラクター

研究者番号（8桁）：(60322327)

研究分担者氏名：宮部 真由美（2018.6～）

ローマ字氏名：(MIYABE Mayumi)

所属研究機関名：大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立国語研究所

部局名：日本語教育研究領域

職名：プロジェクトPDフェロー

研究者番号（8桁）：(60823383)

(2)研究協力者

研究協力者氏名：松下 達彦

ローマ字氏名：(MATSUSHITA Tatsuhiko)

所属研究機関名：東京大学

部局名：総合文化研究科・教養学部

職名：准教授

研究協力者氏名：柳田 直美

ローマ字氏名：(YANAGIDA Naomi)

所属研究機関名：一橋大学

部局名：森有礼高等教育国際流動化機構

職名：准教授

研究協力者氏名：本多 由美子

ローマ字氏名：(HONDA Yumiko)

所属研究機関名：一橋大学大学院言語社会研究科大学院生

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。